

前略

〇様

早速のメールありがとうございます。

〇さんの相変わらずの読書や映画鑑賞の量の多さにはいつも感心しています。

ただ、その中に、マルクスや広松さんの古典的な書物が入っていることを期待しています。なぜなら、それらの書物こそが私の精神の糧であるからです。

また、映画は、一目瞭然、それを通して、我々の全視聴感覚が刺激を受ける事で、非常に有力な思想形態だと考えています。

かつて、広松さんが「映像で知ると言葉で識ると」という評論を書いていますが、その中で、「「知る」という営みは或る意味では優れて個人的な営為であるようにみえて、そのじつ、他者との交通によって媒介された共同主観的な営為である事を否めないであろう。密室での孤独な思索と称されるものであっても、彼の思索を支える知識の圧倒的大部分は、直接的な体験の成果ではなく、言語的交通を介して獲得されたものであり、そもそも論理的思考が言語的活動を抜きにしては存立しえない以上、それは決して純然たる個人的営為ではない。」・・・上述した「或る者としての誰か」という範式を借りていえば、人は「知る」時、単なる一私人としてではなく、「人々としての私」「我々としての我」とでも呼ぶべき相で何かを知るのである。」と。（「広松コレクション5」p163）

広松氏言うところの「我々」が、それが属するところの、その範囲、階級、階層の思想性という問題を解く鍵になると思います。

鶴見さんの「言い残しておくこと」の中では「ベ平連」時代の人称の呼称では、IとかYouとかではなく、この「我々」が使われていましたね。その点、興味深く読ませていただきました。

また、〇さんが言われた、「国家主義的に右にシフトした世の中の力学が少しでも真ん中方向に戻って欲しいと思っています・・・」という認識こそが、（反体制的な）「我々」のそれだと私は思っています。今現在、「安倍政権打倒」の「我々」の勢力をこそ拡張させて行かなければならないと考えている次第です。

また、鶴見さんのマルクス主義理解を「スターリン的」と言った事については、「スターリン」の思想・時代をあまり知らない私が言う事ではなかったと反省しています。失礼しました。

ただしかし、それこそ貧困と格差を構造的に生み出し、地球生態系を破壊して顧みない現体制の基幹関係たる賃労働・資本の資本主義的階級社会を廃絶し、反体制を志向する「我々」が、思想的にも閉塞状況にある近代主義的世界了解を乗り越える為には、もう一度、しっかりとマルクスや広松さんの哲学的古典を学び直す必要があると強く感じている次第です。

最後にまた、いま、なつかしいM大のM文研、現史研時代（60年代～70年代初期）を思い出しています。あの若かりし頃の無鉄砲な毎日、反体制運動（ベトナム反戦を含めて）のさなかに明け暮れていた頃を思い出しています。

そのなかで、私は、広松氏には、雑誌”思想”に論文を発表の頃から注目していました。一浪と留年を重ねて、思想的に悶々としていた頃、広松さんの”マルクス理解”や”哲学”に強烈に惹かれた事を今でも思い出します。

当時、M大紛争のなかで広松さんに依頼して「マルクス主義の第三段階」を講演していただいた事、その講演が、私には、” 機関銃でも撃っているような” 強烈な印象を受けたことまで、鮮明に覚えています。

また、現代史研究会のサークル室での「資本論」読書会です。今はなき、KさんやIさん、それにあの広松さんをサークル室に招いて、資本論第一巻の初版（第一章？）と第二版との比較・相違をレポートした事をいまだに覚えています。

大学紛争さなかでの読書会だったと思います。（1、2回やっただけですが）

（資本論第三巻読書録については、下記ブログを参照してください。今年7月完了）

<http://blogs.yahoo.co.jp/jk2unj/39273028.html>

ともあれ、私にとって、広松さんの思想は、未だに ” 導きの糸” です。

それ以来、私の病気もあって、又、社会に出たりして旧友とはほとんど会っていません。熱海で会った人たちが最後です。あっという間の人生です。

そのころのリーダー的な人々が今日、ほとんど姿を消していますね。

最近、ホームページの関係で少し調べたのですが、（順不同）

広松渉（1933.8.11～1994.5.22）（65才）、いいだもも（1926.1.10～2011.3.31）（85才）

平田清明（1922.8.17～1995.3.1）（73才）、丸山眞男（1914.3.22～1996.8.15）（82才）

小田実（1932.6.2～2007.7.30）（75才）、藤田 省三（1927.9.17～2003.5.28）（80才）

土井たか子（1928.11.30～2014.9.20）（86才）、ベアテ・シロタ・ゴードン

（1923.10.25～2012.12.30）（89才）、不破哲三（1930.1.26～）（84才）、

水田洋（1919.9.3～）（95才）、鶴見俊輔（1922.6.25～）（92才）・・・

20世紀前半に生を受けたリーダーたちが、21世紀まで存命して影響力を発揮しているのは、この中で私が知る人は、水田、鶴見、不破さんの3人です。

この中で、95才で最高齢の水田さんが、今なお健在であるのは、ゼミ生である我々の” 誇り” です。私自身、” 水田ゼミ” を選んだ理由の一つは、水田さんが当時書いていた、「マルクス主義入門」や社会科学関連の書物に接した事だったと思います。）

また、この中で、日本共産党社会科学研究所、所長の不破さんは、今でも盛んに執筆活動をしています。私は、彼の本はたいして読んでいますが、今なお、著作活動をしている姿（不満な点もあるが何か新しい事を教えられる事もある）には驚いています。

彼なりの” 日本共産党” に対する” 思い入れ” があるからだろうと考えています。

ただ、第三者的に言えば、その姿勢は、「” 日本共産党” に対する」愛党心であって、「我々」が目指す、「” 地球共同体” に対する」指導理念にまではまだ至っていない（その点で思想的には広松以下だが党の勢力では上）と私は見えています。

（ブログ・日本共産党綱領批判参照、また、私の綱領は「資本論」です。）

それでも今現在、日本共産党の全体を思想的に指導しうる唯一の人物ではないでしょうか。彼らは、マルクスの理論を組織のそれとして、良い意味で、護持する必要があるという事も一因になっていると考えています。

以上、とりとめない話に脱線してしまいましたが、広松さんのように短命ではなく、不破さんのように長命であれば、” 骨董的な” 日本共産党の（裏）話も聞ける機会があるというものです。

最後に、Oさんのメール、また、よろしくお願ひします。期待しています。

取り急ぎ、メールの御礼まで。

Y o u r K . M